

道路農検定検査協会（札幌）によると、十勝管内の 6 月の牛群検定成績は 1 頭 1 日当たりの平均乳量が 33.4 キロで過去最高を記録した。全道でも 31.7 キロで過去最高を更新。十勝の乳量は道内の地区別でトップの数値で、関係者は前年産の粗飼料の品質や長年の乳牛の改良が乳量の増加につながっているとみている。

◆餌の品質や乳牛の改良で

同協会には、十勝管内の生乳出荷戸数の 80.7% に当たる 910 戸が加入。全道は 75% に当たる 4021 戸で、生乳の乳量や成分を検定している。

年間の乳量は夏場にかけて増えて 6 月前後にピークになる。気温の上昇と共に水分を多く取ることや、新鮮な餌が食べられること、分娩（ぶんべん）の多い時期などの要素が影響しており、暑さが厳しくなる夏から冬にかけて次第に減少していく。

十勝の 1 頭 1 日当たりの平均乳量はこれまで、2016 年 6 月の 30.0 キロが最高だったが、この 6 月は 0.4 キロ上回った。今年は 1 月以降連続で、月別の過去最高も更新している。

道内他地区の 6 月の乳量は、十勝の次が石狩の 33.2 キロ、網走 32.8 キロ、上川 32.2 キロ、胆振 31.3 キロ、空知 31.1 キロ、根室 30.9 キロ、釧路 30.1 キロとなっている。同月全道平均も前年同月比 0.3 キロ増。

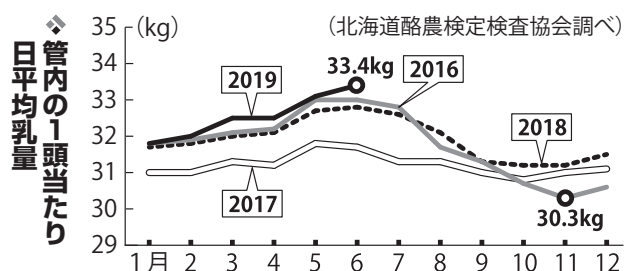
同協会は「ここ数年は各地で乳量が増加傾向にあり、全道平均でも過去最高を記録した」とする。

乳量を左右する要素の一つは、主食になる餌の粗飼料の質。管内は昨年、6 月以降の天候不順で畑作物は振る

わなかったが、牧草やデントコーンの飼料用作物は適期収穫で平年並みを確保できた。また乳牛の改良も重要で、健康で乳量の多い牛づくりの成果が結び付いている。

国内では本州の酪農家の離農が進み生乳生産が減少傾向。北海道が供給をカバーしていて、道内でも主産地の十勝に対する期待は大きい。

同協会理事で十勝乳牛検定組合連合会の山田敏明会長（幕別）は、「1 年で 1 万キロ搾る牛もいるなど、乳量増は酪農家の技術向上と農協連など関係機関の努力のたまもの。現在は農家の意欲を引き出す乳価になっているので、今後も頭数や乳量は増えていくのではないかと話している。



最新搾乳ロボ紹介 大手 2 社、十勝で発表会

2019 年 8 月 3 日

酪農現場の増頭意欲と労働力不足を背景に、管内の大規模酪農家で、自動搾乳ロボットの導入が目立ってきた。国の支援が追い風になっており、メーカー側は性能を高めた新機種を開発、相次いで国内での販売を開始している。十勝管内では発表会や見学会が開かれた。



末瑠来ファームが導入した
レリーの搾乳ロボット

◆より速く正確に 処理量 4% 向上 レリー

搾乳ロボットのパイオニアのレリー（オランダ）は昨年春、新型の「アストロノート A 5」を発表。国内では今年 5 月、音更町の酪農法人が初めて 2 台を導入した。7 月には上士幌町の末瑠来ファームでも 4 台が稼働した。代理店の酪農機械輸入販売大手コーンズ・エージー（恵庭）は 7 月 30、31 の両日、同農場などで見学会や発表会を開いた。

乳房に搾乳機を取り付けるアーム部分を改良、より速く正確に作業に入れるようになった。作業時間が短縮されて機械の回転率が上がり、海外農家によるテストでは生乳処理量が 4% 向上した。機械を動かすタッチパネルも操作性を高めた他、牛が搾乳機に入りしやすい構造にした。

見学会・発表会には道東を中心に約 250 人が集まった。レリーのマルセル・ファン・レーウェン輸出部長は「これまでの機械に比べて牛の快適性、機械の操作性、経済性が向上した。修理訪問の頻度は少なく、信頼性も高まった」と語った。

約 670 頭を飼育している同農場の上森和江社長は「搾乳時間が長い課題があり、労働